

平成28年度 第1回 宇都宮市総合教育会議 議事録（概要版）

- 1 日時 平成28年 9月23日（金） 午後4時～午後5時
- 2 場所 宇都宮市役所13階 教育委員室
- 3 出席者
（構成員） 佐藤市長，
水越教育長，大場教育委員，若度教育委員，伊藤教育委員，山田教育委員，
（関係者） 高井副市長，吉田副市長，
（事務局） 篠塚教育次長，小堀学校教育担当次長，梓澤教育企画課長，
増淵総務担当主幹，神谷学校管理課長，栗原学校教育課長，
大島学校健康課長，大久保生涯学習課長，伊藤中央図書館長，
松本文化課長，阿部スポーツ振興課長，小林教育センター所長
大出教育企画課長補佐，田上教育企画課企画G係長，
関教育企画課総括主査
- 4 傍聴者 1名
- 5 議題
本市教育の充実について

6 議事の内容

1 開会

篠塚教育次長 定刻になりましたので、ただいまから、平成28年度第1回宇都宮市総合教育会議を開会いたします。本日の会議の進行を務めさせていただきます。教育次長の篠塚でございます。よろしくお願いいたします。

2 あいさつ

篠塚教育次長 はじめに、佐藤市長からごあいさつをお願いいたします。

佐藤市長

佐藤市長あいさつ

篠塚教育次長

続きまして、水越教育長よりごあいさつをお願いしたいと思います。

水越教育長

水越教育長あいさつ

篠塚教育次長

これからの議事については、市長をお願いしたいと思います。市長、どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤市長

議事 「本市教育の充実について」

それでは早速、議事に入ります。
「議事 本市教育の充実について」ですが、まず事務局から主要事業の進捗状況について説明をお願いします。

事務局

・事務局より主要事業進捗状況の説明

佐藤市長

それでは、教育委員のみなさんから意見を頂きたいと思います。まず大場委員からお願いいたします。

大場委員

私からは心の教育の推進、人づくりの推進に係る話をさせていただきます。先日「第38回栃木県青少年の主張」の審査をし、特に心に残っている話をさせていただきます。それは、発表した生徒がいじめの加害者であったというものでした。生徒のクラスに、身体に障がいのある生徒が転校してきて、担任がその生徒に色々配慮するのが段々疎ましくなってきた、その生徒が特別扱いされている、えこひいきされていると感じるようになり、いじめへとつながっていき、障がいのある生徒が不登校になってしまったというものでした。幸いにも被害者の母がいじめに気づき、クラスに行って友人の良いところを見つけようという授業をしてくださったことから、加害者の生徒も立ち直ることができたそうです。被害者にも加害者にも心の傷を残したことが残念です。いじめはなくしていかないとはいけませんし、防いでいきたいというのが本当のところかと思います。国では道徳の教科化に取り組んだり、本市でも宮っ子心の教育、いじめゼロ運動等たくさん取り組みしておりますが、心の外側から善悪を教えるという取組かかと思ひます。そうではなくて、心の内側から働きかけるものが必要なのではないのでしょうか。座禅とか瞑想に通じる、世界的にも効果が実証されている「マインドフルネス」を教育のプログラムに取り入れることによって確かなものになっていくと思ひます。既にアメリカ、イギリスでも学校に取り入れられ成果が実証されております。ぜひそういったものを考える時代になっているのではないかと思ひております。

佐藤市長

次に山田委員からご意見をお願いいたします。

山田委員

私たち一般市民が市役所に呼ばれている理由を根本的に考えた時に、行政の方たちが分からない部分の風通しをよくするのが役割の一つだと考えております。教育委員会の業務が多岐に渡りすぎており、みなさんそれぞれが専門の中でやっても、隣の課は何をしているか分からない。その中で自分とはとにかく学ばなくてはいけないということを痛切に感じているところではあります。PRとか広報、広聴活動がうまくいかないというのも、もう1つ踏み込んだ、何か責任を一人一人が持っていくというようなところが一般の市民の方にも必要だと思ひます。

教育だけでなく宇都宮市を支えていく皆さん、例えば団体の皆さんは高齢化が進み、意識の希薄化が進み、一つ一つの行事など団体の活動がマンネリ化し、これ以上どのように発展していくのかというところがあります。一人一人が学ぶ姿勢、学ぶ力を何か責任を持った上での活動になるよう、教育委員会がリーダーシップを持って取り組んでいくことが必要だと思ひます。

また、教育委員会では様々なイベントを催しておりますが、今後できるかどうか分からない話ですが、13階祭りみたいなものを企画して色々な

方に知っていただくものに発展していくといいのかなと思います。PRや取組を色々やっているのに一人一人に届いていないことを感じるので、草の根活動を含めて発信していける仕組みづくりをしていきたいと思っています。

佐藤市長

次に若度委員からご意見をお願いいたします。

若度委員

4年間教育委員をやらせていただいて、役所の方は一生懸命仕事をしているというのが印象です。役所の方も昔はぶっきらぼうで態度が大きい言われた時代がありました。現在は逆に親切過ぎて、役所の方は何でも受け入れようとしているのかなと思います。家庭でやることは家庭で教えれば良く、子育ての基本は家庭にあることが原則なので、学校の先生も一線を引き、これは親がやる、家庭でやるという対応をしていかなくてはいけないと感じます。なんでも飲み込むとお役所は立ち行かなくなると思います。ある一線を見極めることも役所の仕事で、親切なものと抱え込む、何でも受け入れることは意味が違うと感じています。

私としては教育委員会が宇都宮のことを、もう少し歴史とかの分野で、もっとリードできればと思っていました。小さいうちから宇都宮の良さ、歴史を教えると、大人になってからこのまちに住んでいくとか、子どもにも宇都宮の良さを教えられるのではないかと思います。

また、地域の連携が常に必要だと感じております。想定外のことが起きる時代です。防災関係等、想定外のものを想定しなくてはならない時代になっていると思いますので、大変だと思いますがその辺も考えて欲しいと感じております。

伊藤委員

前回の定例会でありましたが、不登校が低学年化しているということです。教育委員会でもスクールソーシャルワーカーを活用して、その原因過程を尋ねる良い試みだと思います。社会の貧困化、格差社会で家庭の問題が深刻化している中で、不登校の原因も色々考えられる。不登校は発見の一つの端緒となるわけで、弁護士がさらに協力できないかと思っています。スクールソーシャルワーカーといっても法律職ではないので、「虐待しているのだろう」だけでは踏み込みづらい部分があるので、弁護士だとそれがおかしいのではと言っていけると思います。保護者で手に負えないと思ったら、弁護士の立場から何か協力できるのではないかと近頃思っています。そういうことに力を貸せばやりたいと弁護士会にも話しています。色々な原因があるので、根絶は難しいと思っていますが可及的速やかに救ってあげたいですし、教育委員会の目標にさせていただけると良いと思います。

次に、文化の話ですが、宇都宮を有名にするために宇都宮の小説を誰かに書いてもらうとか、アニメを立ち上げてもらうとか、難しいと思いますが話題性を作ってはどうかと思います。宮っ子といますが、宮っ子のイメージが今一つ沸かない。宮っ子の誓いを見ると誰からみてもよい子だけれど、魅力がないので、欠点のあるキャラクターは愛される部分もあるの

で、そういうキャラクター作ってもよいのではないかと考えています。

佐藤市長

では、次に水越教育長からのご意見をお願いいたします。

水越教育長

私が最近頭を悩まされている、考えていることを話させていただきます。私が教育長に就任以来、「共に歩む教育委員会」「先を見る教育委員会」もモットーに進めてきました。「共に歩む」は職員も大分意識してきて、浸透してきました。「先を見る教育委員会」というのは10年先、20年先を見据えということですが、今の世の中を見るとあまりにも進展が早すぎて、情報化、グローバル化、人口減少、超高齢化社会などこれから先はどのような社会になって、どういう資質が必要なのか、そこまで見据えなかったら先をみる教育委員会とはならないのではないかと悩んでおります。結論とまでは行きませんが、どのような社会になっても対応できる人間を作っておくことだろうと思っております。教育の成果は今日やったことが明日出てくるものではなく、10年後、20年後、30年後、あるいは数十年後に出てくるものであります。10年後、20年後の社会を背負って、今やっておかなかつたら、変化の激しい世の中に対応できません。どんな社会になっても生き残れるのは何なのかを突き詰めていくと「心」の部分だと思います。もちろん読み書きの基礎能力は必要ですが、今身に着けた知識が役立つかわかりませんが「心」だけは変わりません。その部分は大切に、市長のおっしゃる「人間力」、生き抜く力、折れない心、努力、粘り強さ、そして最も大切な責任感、社会に対する責任とか年上を支える責任などがあるかと思っておりますが、そういった責任感をきちんと身に付けていけないと、10年先、20年先の日本を支えきれないのではないかと思います。それを育てるにはどうしたらよいのか。これはというものがあつたら、それを集中してやっていけなかつたといけなかつたという気がします。今の時代はあれもこれもとなつてしまい、中々絞れませんが、これはというものを見つけてやっていけなかつたと思っております。市長は毎回、人間力と我慢とおっしゃっていますが、ずっと言い続けて染み込ませていくといけなかつた、人を支えきれないのではないかと毎日考えているところですので、市長からのよいアドバイスを頂ければと思います。

佐藤市長

教育委員の皆様ありがとうございました。

教育長、大場委員からもやりぬく心とか折れない心の話がありましたが、これからの時代は先が読めない時代ですが、明らかに分かっていることは超高齢化社会とそれを支える人達が減っていき、5人に1人が65歳以上という構成が主となり、本市においても4人に1人、他の市町村では3人に1人であり、今後も肩車状態の自治体も出てくるということです。これでは、年金、医療、介護の制度は支えられません。これからの子ども達が支える側になった時に、子ども達の心が折れてしまうのではないかと危惧しているところです。ひきこもりの若い人は全国で54万人いて、本当は支える側の人になるはずが、そのような人も支えていけなかつた

いとなると若い人はやりきれないのではないかと思います。教育長がおっしゃったように先が読めない社会になっても、どんな社会でも対応できる人を教育で育てるといふ、大変大きな課題ですが痛烈に責任の重みを感じているところです

伊藤委員から話のあった不登校、モンスターペアレントですが、現場の先生も、PTA役員もみんな困っていることだと思います。専門的な弁護士の立場から対応していただくと現場も楽になりますし、そういう仕組みもこれから必要になってくるかと思っています。

スポーツ分野の取組の中で弁護士の資格とは違って、スポーツで企業と契約をしているあるいは、雇用されているスポーツのプロ、トップアマチュアの人達が引退後は学校に来ていただいて、専門の指導ができない部を補完してもらおうということもあり得るのではないかと思います。社会の企業あるいは専門職、資格職の方の力も教育の現場に必要なようになってくるのではないかと思います。

若度委員がおっしゃったところに繋がるかと思いますが、家庭が行う事、行政が行う事、学校が行う事の延長に企業が行う事もあるのではないのでしょうか。若度委員のご指摘の内容で胸にきたのは、行政が何でもやり過ぎているということです。我々はサービス業であるということを行き過ぎているというご指摘だと思いますが、肝に銘じて、社会全体で共有していかないと、何でも頼ってしまう環境を作ってしまうと我々の仕事は上手く分担できないと思います。これではよいサービスの提供ができないと思います。教育委員会だけではなく全部局に言えることではないかと気付かせていただきました。ありがとうございました。

この間、秋の交通安全市民総ぐるみ運動に教育長と出席しまして気付いたことですが、前段で県の交通安全があり、県民の歌を歌いました。以前から都道府県別にみると、栃木県民ほど県民の歌を歌える県民はいないということで褒めたたえられていましたが、学校でも歌っているかと思いますが、表彰された小学生の子ども達が8人くらいおりましたが、宇都宮の歌が流れた時に、サビの部分しか歌えず他は全然歌えませんでした。これは今後の教育委員会の方針の中で、ぜひ委員さんからいただいた課題と併せて宇都宮の歌が歌えるようになるといいなと思います。

皆さんからいただいたご意見と私からの意見を述べさせていただきました。この後は皆さんから自由な意見交換をさせていただきたいと思います。

佐藤市長

PTA会長をやっていたときに、親御さん達に言ったのは、いじめは自分達の時代とは違い、自殺に至るなど大きな問題となっていると言いました。いじめている側ならいいやと思っている親御さんもいらっしゃいました。一千万、二千万といった損害賠償を請求される場合もあり、甘く考えたら大変な事になりますという話をしましたが、一PTA会長ではなく、弁護士さんからそういう話をしてもらおうとか、警察官から現場の話してもらおうということがPTAの保護者に必要なのではと伊藤先生の話聞いて思いました。

- 大場委員 いじめはその場限りではありません。たとえ解消しても、いじめは被害者の心に何十年も大きく残ると聞きましたので、本当に深刻な問題だと思います。
- 佐藤市長 中々人に言えない、だからひきずるという子は心に傷が残ります。自分がその子の親だったらと思うといたたまれない気持ちになります。そういうのを保護者のみなさんに共有してもらおうと良いのではないかと思います。
- 山田委員 家庭教育という観点から言った時に、私達の時代もどうだろうということもありますが、例えば子ども達に雑巾を絞ることを家で教えなくなっております。何か小学校低学年のうちから、家庭教育でやれることに地域の力を借りられるヒントがあるような気がします。一つのアクションが違うアクションにつながり、ゴミの減量化にもつながったり、おばあちゃんの知恵袋を教えたり色々なことに繋がっていくと思います。家で雑巾を絞ることを教えないというのは、布巾で拭くことが不衛生だということから、使われなくなっていることもあるかと思えます。雑巾は使い捨てではなく、ゆすげば使えます。雑巾を絞ることなどを地域協議会、魅力ある学校づくり協議会などで教えられたらいいなと思っています。
- 佐藤市長 学校の先生にあれこれ求めても、学校がやること、できること、家庭がやることは別であり、基本が一番長くいる生まれた時からいる家庭だと思っています。そこで世にでて、知らないことを学校で得ることはたくさんあり、それを先生から教えてもらうのだと思います。
他にご意見はないでしょうか。
- 佐藤市長 それでは、意見も様々頂きました。いつも貴重な御意見を頂いておりますが、そのご意見をもとに行政として、教育行政として、市長部局としても、全体で捉えてオール宇都宮で、これからもやってまいりたいと思えます。本当に難しい課題も頂きましたが、難しいからと手をこまねいていては、日本一の教育を目指している宇都宮市として、その掲げた目標を達成できませんから、子どもたちのため、社会のためにこれからも進めてまいりたいと思えます。
それでは、事務局に進行を戻します。
- 篠塚教育次長 ありがとうございました。
以上で、平成28年度第1回宇都宮市総合教育会議を閉会いたします。